

エラータグ付き日本人英語学習者発話コーパスを用いた

学習者の冠詞習得傾向の分析

和泉絵美^{†*} 齋賀豊美^{††} Thepchai Supnithi^{††*} 内元清貴[†] 井佐原均^{††*}通信総合研究所自然言語グループ[†]通信・放送機構[†]

神戸大学大学院

Information Technology R&D Division, NECTEC, Thailand^{**}

1. はじめに

英語学習支援環境の構築を目指し、日本人の英語習得過程のモデル化に取り組んでいる。効率的な学習を促すためには、学習者の習熟度に応じて適切な学習の指針が示されるのが望ましい。そのような指針を示すために、まず学習者の様々な誤りを整理し分類する必要があると考え、その基礎データとなる能力段階別日本人英語学習者発話コーパスを作成してきた。

そのコーパスに現れた文法のおよび語彙的誤りを体系的に整理し、それに基づいて約45種類のエラータグを定義し、学習者データに人手でタグ付与を行った。コーパスにおけるエラータグの出現傾向を調べた結果、最も多く出現するのが冠詞のエラーであること、学習者の習熟度によりその出現傾向に違いがあることが分かった。本稿では、コーパスに付与されている能力レベルの間での冠詞エラーのタイプ別比較やエラーの原因として考えられる、母語である日本語の干渉についての検討などによって日本人の英語冠詞習得の傾向を分析する。

2. 日本人英語学習者コーパス

2.1 概要

今回の分析には、日本人学習者の英語話し言葉コーパスの一部を使用した。本コーパスは一件15分のインタビューテスト（髙アルクによって実施されている SST: Standard Speaking Test）の書き起こしテキスト1200件（約300時間分・のべ100万語）からなる。それぞれのデータはSST独自の基準により9段階にレベル判定されている。この習熟度に関する情報は、今回のように、学習者の発達段階別の傾向を観察する際に有効であると考えられる。

2.2 エラータグ

本コーパスのデータの一部には、文法的・語彙的誤りを対象とした45種類のエラータグが付与されている。学習者の誤りを質的・量的に分析することは、学習者の習得段階をモデル化するための有効な手段の一つである。

エラータグの付与は主に英文法に精通し、英語教育・第

二言語習得・英語学などを専門とする大学院修士から博士レベルの作業員によって行われた[1]。冠詞エラータグが付与された文の一例を以下に挙げる。

EX) *This is <at crr="a"></at> great book.

上記例のうち、<at crr="a"></at>の部分がエラータグである。見出しの at はエラーの種類、つまり冠詞の誤りであることを示し（at は article の略）、crr="a" は訂正候補を表す。本研究では、学習者データのうちエラータグが付与されている箇所を対象に分析を行う。

3. 冠詞エラーとは

3.1 日本人にとっての冠詞習得の難しさ

日本人英語学習者にとって、冠詞が最も習得の困難な文法項目のひとつであることは広く認められている。先にも述べたように、本コーパスにおいてもエラータグの対象となっている45種類の誤りうち、最も多く出現したのが冠詞エラーであった。冠詞の習得が困難な理由として、一般的に次のような事柄が挙げられている。

- 内容語に比べて、冠詞のような機能語は具体性を欠いており、実体がなかなかとらえにくい。ため。（冠詞そのものの性質による原因）[2]
- 冠詞という機能が母語である日本語にないため。（母語の干渉による原因）

今回の分析では、学習者データから得られたエラー情報を元に、上記2つの原因をさらに詳細に検証したい。

3.2 エラーのタイプ

冠詞エラーは様々な角度から検討することができるが、目標言語の正用法と学習者の誤用法が表層上どう異なるかという視点から冠詞エラーを分類すると、以下の3タイプに分けられる。

タイプ1: 脱落タイプ

必要な箇所冠詞を完全に付け忘れているケース。

EX) *Is it <at crr="a"></at> nice place?

一般的に、このタイプは特に初級学習者の誤りにより多く見受

けられるとされる。

タイプ2: 余剰タイプ

不必要な箇所冠詞が余分に付けられているケース。

EX) *I lived in <at crr="">the</at> New Jersey.

タイプ3: 置換タイプ

ある冠詞が必要な箇所に誤った冠詞もしくはその他の決定詞が付けられているケース。

EX) *I saw<at crr="">a</at> the</at> girl in front of my house.

本研究では、上記3タイプを元に、レベル間での比較やタイプ内での更に細かい分類を行い、習熟度の推移によって変化する事柄、習熟度に関係なく普遍的に見られる事柄を共に検証することにより、本コーパスで見られる日本人の冠詞習得傾向を分析していく。

4. コーパス内での傾向調査

4.1 対象データ

今回使用したのは、2. で述べた日本人英語学習者発話コーパスのうち、エラータグが付与されている102インタビュー(約25時間分・のべ9万語)内の冠詞エラータグが付与されている箇所(=誤用が起こっている箇所)のみである。2.1で述べたように、すべてのデータは習熟度によってレベル1~9に振り分けられている。今回は各レベルのデータ量が少ないため、9段階別に比較するのではなく、レベル1~3を初級、レベル4~6を中級、レベル7~9を上級とし、3段階で分析を行った。具体的なインタビュー件数とそれらに含まれる冠詞エラー数、出現名詞数、および100名詞あたりの冠詞エラー数は以下の通りである。

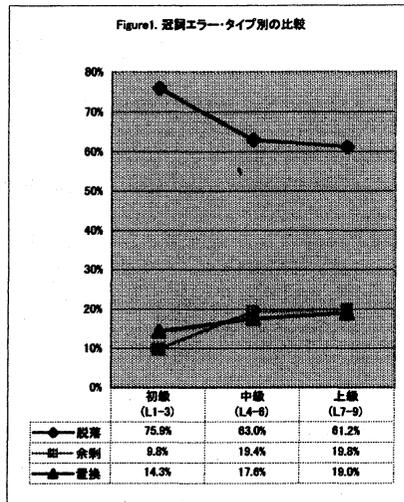
Table1. 対象インタビュー、冠詞エラーと100名詞あたりの冠詞エラー数

	インタビュー数	冠詞エラー数	出現名詞数	100名詞あたりの冠詞エラー数
初級(L1-3)	37	569	3156	約18
中級(L4-6)	35	817	4818	約16
上級(L7-9)	30	547	5927	約9

Table1.に見られるように、100名詞あたりの冠詞エラー数はレベルの推移と比例している。初級レベルと中級レベルの差が中級レベルと上級レベルの差よりも小さい理由としては、初級学習者の発話量が極端に少なく、冠詞がかかわる文脈の出現頻度自体も低いため、必然的に初級レベルのエラー率が低くなってしまったためではないかと推測される。

4.2 タイプ別の比較

まず、初級・中級・上級の3レベル間で、3.2で述べたようなエラータイプ別の比較を行った。Figure1.は、全冠詞エラーに占める3タイプの割合を表にしたものである。



すべてのレベルを通じて最も多いのは脱落タイプの誤りであった。また、レベルが上がるごとに脱落タイプの割合は低くなるのが分かる。一方、余剰エラーと置換エラーはレベルが上がるごとにその割合が高くなっている。初級レベルにおいては置換エラーが2番目に高い割合となっているが、中級レベル以上は余剰エラーが2番目に高い割合を占めている。(Figure1.)

上記それぞれの結果から、日本人英語学習者の冠詞エラー傾向について以下のように推測できる。

結果1: すべてのレベルを通じて脱落タイプが最も多い。

考察1: 一般に、このタイプのエラーは初級学習者により顕に見られ、中級以上ではほぼ消滅するとされている。その原因として考えられているのは、脱落タイプのエラーは比較的初歩の統語的制約に関わるものであるということである。しかし、本コーパスにおいては中級・上級レベルにおいても、減少傾向にはあるものの、他のタイプよりも遥かに多くの脱落タイプが出現した。この原因としては、これまでの第二言語習得研究のほとんどは文法項目を重視した内容の英作文データを対象に調査したのに対し、本コーパスは自然発話、しかも対話からなるものであるため、中級以上の学習者でも、内容面に気を取られるあまり、初歩の統語的制約に関する注意がおろそかになる傾向があったからではないかと推測される。

結果2: レベルが上がるごとに脱落タイプの割合が下がり、余剰エラーと置換エラーの割合が上がる。

考察2: 置換エラーの増加の原因を考えるにあたり、考察1で述べたように、脱落エラーは統語的制約に、そして置換エラーは意味・語用論的制約に関わるものである

という事実が手がかりの一つとなる。意味・語用論的制約は統語的制約よりも母語の干渉をより強く受けやすいため、母語と目標言語の間の意味的隔たりによって生じる置換エラーはレベルが上がっても執拗に残るからであると考えられる[3]。

また、余剰エラーの増加の原因としては、脱落エラーが理解不十分な規則の使用回避という初歩的なコミュニケーション方略によっても引き起こされるので、中級以上では減少する分、今度は習得が難しい冠詞の存在を強く意識し過ぎるあまり、余剰冠詞を付与してしまう傾向があるからだと見ることができる。

結果3：初級レベルにおいては置換エラーの割合が2番目に高いが、中級レベル以上は余剰エラーが2番目に高い。

考察3：この原因としては、結果2でも述べたように、中級レベル以上になると、目標言語に対してより分析的になり、習得が難しい冠詞の存在を強く意識し過ぎるあまり、冠詞の過剰使用が起こりやすいたことが考えられる。

4.2 各エラータイプ内でのパターン比較

前項では、タイプ別にレベル間の比較を行ったが、次に、各エラータイプ内で見られるいくつかのパタンの間の比較をレベルも絡ませて行った。

4.2.1 置換タイプのパターン比較

まず、この検証に有効であると思われる現象が置換エラーにおいて観察された。今回のデータ内での置換エラーには次の4つのパターンがあった。

- パターン1：a/anを必要とする文脈でtheを使用。
- パターン2：theを必要とする文脈でa/anを使用。
- パターン3：anを必要とする文脈でaを使用。
- パターン4：a/an/theを必要とする文脈で他の決定詞(this, that, one など)を使用。

すべてのレベルにおいて、これら4パターン間の出現率比較を行った。Figure2. は全置換エラーにおける4パタンの割合をレベル別に表したものである。

Figure2. 置換タイプのパターン間比較

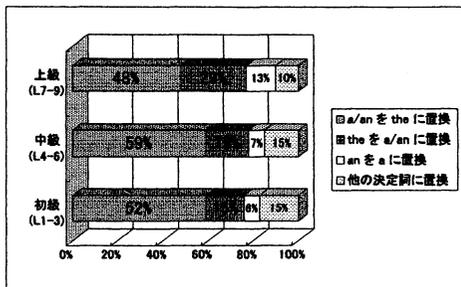
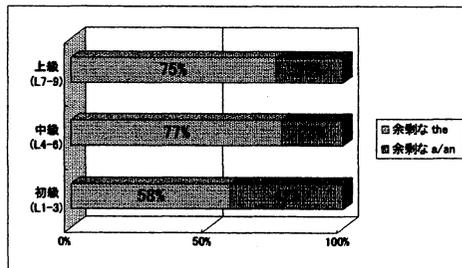


Figure 2. から分かるように、すべてのレベルにおいて、パターン1のa/anをtheに置換するケースがほぼ半数を占めた。このように定冠詞theを過剰使用する傾向が顕著に表れる原因はいくつか考えられる。一つは、aかtheかで迷った場合はとりあえず単数形・複数形・抽象名詞などにも付き得るtheを付けておく傾向にあるのではないかと、ということである[2]。これは学習者による規則の制限の無視[4]とも言えるが、反面、規則の理解が不十分であってもコミュニケーションを続行させるための学習者なりのストラテジーとも解釈できる。加えて、本コースのデータとして使用しているインタビューテストでは、イラストを描写するタスクがあるため、イラスト内の対象物を指して日本語の「この・その」的に定冠詞theを過剰使用する傾向にあるのではないかと推測される。

4.2.2 余剰タイプのパターン比較

また、置換エラーにおいては、中級レベルで定冠詞の過剰使用が最も多く見られるものの、上級レベルでは最少になっていた(Figure2)のに対し、余剰エラーでは中級・上級レベル両方において初級レベルよりも顕著であることが分かった。(Figure3)

Figure3. 余剰タイプのパターン間比較

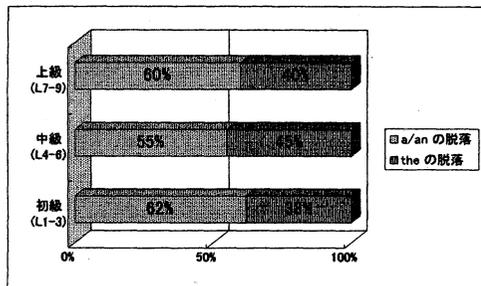


これは、定冠詞と不定冠詞の区別よりも、ゼロ冠詞の機能の認識の方がより難しいためと考えられる。ゼロ冠詞は明白な形を用いては表現されない特定の意味を暗示するので、何も付けないこととは異なる[3]。冠詞が存在しない母語を持つ日本人学習者にとって、冠詞という規則を意識する際に、定冠詞や不定冠詞と並列でゼロ冠詞を認識するのは難しいのではないかと考えられる。

4.2.3 脱落タイプのパターン比較

余剰タイプで定冠詞theの過剰使用が多かったのに対し、脱落タイプではすべてのレベルを通じて不定冠詞a/anの脱落が過半数を占めた。(Figure 4)

Figure4. 脱落タイプのバタン間比較



この傾向は、先にも述べたような、「迷ったらとりあえず the を付ける」という日本人の定冠詞過剰使用の影響が一部あると思われる。また、本来不定冠詞が必要な文脈の方が定冠詞が必要な文脈よりも少ないと推測されるが、それにもかかわらず不定冠詞の脱落の方が多い原因としては、学習者はまず発話内容を母語で組み立て、それを目標言語に翻訳して出力することが多いことが考えられる。一般的に学習者は新しく学ぶ英語をその日本語訳と対して意味を理解しようとする。通常、定冠詞 the は「その」と対応付けて記憶されることが多い。一方、不定冠詞 a/an は「一つの」と対で考えることもできるが、「一つの」の対応語としてより強く認識されている one の存在や、「a/an は訳さなくてもよい」と指導する教師も多いことから、発話内容を日本語で想起し、英語に変換する際に不定冠詞の存在を忘れがちになる傾向にあるとも解釈できる。このことは、置換エラーにおいて、本来不定冠詞が必要な文脈で one が誤用される例がいくつかあったことから実証される。

5. まとめ

本研究での分析での結果から、日本人英語学習者の冠詞習得について以下のことが分かった。

- 今回エラータグの対象とした誤りの種類のうち、最も多く出現したのが冠詞エラーであった。
- 初級・中級・上級すべてのレベルにおいて脱落タイプのエラーが最も多く見られる。
- レベルが上がるにつれてエラータイプが分散する傾向がある。
- 置換・余剰タイプのエラーにおいては、定冠詞を過剰使用する傾向が見られる。
- 脱落タイプのエラーにおいては、定冠詞よりも不定冠詞がより頻繁に脱落する傾向が見られる。
- 上記の傾向の原因としては、母語である日本語に冠詞が存在しないことが大きく影響していると考えられるほか、理解不完全な規則に対して使用回避や単純化を行うことによってコミュニケーションを続行させようとする、学習者による

コミュニケーション方略が考えられる。

学習者のコミュニケーションスキルを検証する際には冠詞の誤用は重要視されないことが多いが、日本人の冠詞習得傾向について分析することは、学習者の文法項目習得過程のモデル化においては意義を見出すことができる。

また冠詞の誤用が比較的初歩的なコミュニケーションに重大な影響を及ぼしにくいとはいえ、冠詞に対する理解不足を放置しておくことは規則の不完全な理解の化石化 (fossilization) につながり [5]、将来的により複雑な内容の理解や伝達を必要とするコミュニケーションを行う際の障害ともなり得るといえる。そのためにも、冠詞エラーの傾向とその原因を分析することにより、現在の教授法の問題点を検討し、より適切な教授法の提案へとつなげることは有意義であると考えられる。

今回はエラー部分のみを分析対象としたが、今後の課題としては、定冠詞・不定冠詞・ゼロ冠詞を使わねばならなかった文脈での正用法率と誤用法率を求めることにより、より明確な習得過程を検証できると考えている。また、エラーが出現する箇所の前後の文脈を探ることにより、どのような語彙の近隣で冠詞エラーがより起こりやすいかについても検討していきたい。

参考文献

- [1] 通信・放送機構, 平成 13 年度先端技術移転加速型研究開発プロジェクト適合型コミュニケーション技術の研究開発研究報告書, 2002
- [2] 石田秀雄, わかりやすい英語冠詞講義, 大修館書店, 2002
- [3] 水野光晴, 中間言語分析, 開拓社, 2000
- [4] ロッド・エリス, 第二言語習得序説, 研究者出版, 1996
- [5] James, C., *Errors in Language Learning and Use*, Longman, 1997